

結果には必ずその過程と原因がある。株式投資・トレードでは大多数の人が損をする。理由は株価がかなり高くなったときにもっと上がると勝手に思い込んで買っただけ、または、もうこれ以上は上がらないと勝手に決めつけて空売りするからである。あるいは、株価がかなり下がったときにもうこれ以上下がらないと勝手に決めつけて買っただけからである。

すべての場合に共通している誤りは「売り」と「買

### 実学の株式投資技術の必要性(10)

## 株価の動きには

## 理由がある

ルを高めるだけでは十分ではない。常に株式相場全体とその銘柄の動きの背景を理解しておくことも重要である。さらに、仕掛ける銘柄をいくつか分散し、かつ、それらを一度に仕掛けるのではなく、分割売買するしかない。

株価は理由もなく動くわけではない。その方向に動くそれなりの理由があつて動く。その理由が一時的なものでない場合、その方向のトレンドが続き、やがて大波となる。トレンドの初動では、その原因はごく一部のみにしか分らないが、その原因がより多くの人に知れ渡るようになると動きが速くなってくる。その

ら相場の波に乗ることである。単純に買って放っておいて儲かることはまれであり、ただ運が良かっただけである。再現するのは難しい。ポジションをもつたら、常に相場観測を行う必要がある。相場観測の基本はチャート・リーディングである。森羅万象すべての変化が最終的に株価に反映され、短期、中期、長期のトレンドを形成する。チャート・リーディングにはさまざまな指標があるが、より多くの指標を使えば、相場の読みがそれだけより正確になるわけではない。むしろ、相反する指示が出て来るので迷いまくり、逆効果となる。移動平均線(10日、25日、60日、250日)、トレンドライン、支持線、抵抗線、幾つかのフォーメーション(ダブルトップ、ダブルボトム、2点天井、2点底など)、出来高の変化、信用残の変化だけで十分である。

い」を単純に間違えただけの話である。「売り」と「買い」を間違えないようにするために、あるいは少なくともするために、チャート・リーディングのスキ



愛知淑徳大学ビジネス学部教授  
三矢 幹根

れをやつと新聞やSNSで記事になり、出来高がそれまでと比べ物にならないほど急増する。ここでようやく一番鈍い人たちにも知れ渡るようになる。

もし、株価の動きを読み間違えて「売り」と「買い」を間違えたらどうするか。ロスカットするか、反対玉を建てて、株価の動きに対する感応度(IIデルタ)をゼロにして一呼吸おくことである。株式トレードとは、簡単に言えば、ポジションのデルタ△をマイナスイ(空売り玉のみ)からプラスI(買い玉のみ)までの間で融通無碍に調整しながらおく必要がある。

基本はあくまでチャート・リーディングだが、相場の流れの背景も理解しておく。上げ相場の初期で、金融緩和や大規模減税が実施されているなら、あるいは世界景気が拡大しているなら、自信をもって押し目を買える。反対に、下げ相場の初期で、金融引き締めや増税が実施されるなら、あるいは世界景気が縮小しているなら、自信をもって戻りを空売りできる。これらの背景を理解するために、日本経済、世界経済、国際金融に常に意識を向け

みつや・みきね コーポレートファイナンス・証券投資論・株式投資・トレード技術。元ドイツ銀行名古屋支店支配人。英国リーズ大学経営学大学院・MBA (Finance)。1959年生まれ。